研究

宇目　水ヶ谷探訪記

戸髙厚司
（会員　大分市）

佐伯市宇目の水ヶ谷は板戸山の南東にあり、県境に近く四方山に囲まれた静かな山里です。かっては豊後と日向を結ぶ日向道沿いにあり茶店もありました。茶屋と言う屋号の民家が今も残っています。

水ヶ谷は延岡藩との国境に近く、岡藩の番所が置かれていた要所で、豊薩戦争や西南の役等歴史の舞台にも登場する大変興味深い所です。

日向道は明治の初めに廃止となり、道（国道）が赤松峠、宗太郎峠へと移り、訪れる人も減り次第に寂れて行きました。

二〇一〇年にこの地を訪れて以来、地元で梓（あずさ）と呼ばれている県境尾根周辺を、携帯ＧＰＳを片手に藪の中を山蛭やダニと格闘しながら踏査しています。

一　日向道と梓峠

随分前、大分合同新聞に宇目の梓峠が紹介されていました。筆者は梅木秀徳氏であったと記憶しています。梓峠はいつか訪ねて見たいと思い続けていた憧れの峠でした。

踏査を始めた頃は、峠の場所が判らず「歴史の道調査報告書日向道」を参考にしながら、現地での聞き取りで峠は鞍部（あんぶ）には無く、標高七〇〇ｍの県境尾根にあることが判りました。天気が良ければ峠から南東方向に北浦の海、北方向に由布岳を見る事が出来ます。尾根の高い所（七二五ｍ）に三等三角点があり最近山岳関係者が梓山と名前を付けました。

県境尾根には三つの峠道があり、西からくすのき峠・大峠・梓峠（国見峠）です。

かっては水ヶ谷と宮崎県の上赤（かみあか）・下赤（しもあか）地区を結ぶ生活道路でした。これらの峠を総称して梓越えと言っても差支えないと思います。

なお、この梓峠については、次のような資料が残されています。

「宇目梓山覚書」　中川家文書

梓山之覚書

一梓山東西へ長し、国見峠より豊後杉日向杉ハ午（うま）の方也
豊後杉日向杉は梓よりへ八戸（やと）へおり候尾筋ニ有

一豊後杉日向杉ノ間、弐拾四間程也

一豊後杉より梓の峠迄拾三町程也、同所三足の馬場ハ大
杉より六七町国見ノ方也

〈中略〉

一梓より日向ノ内八戸村ハ巳午ノ方、梓よりノ下着ノ在
所也　此道壱里半計

一梓より日向ノ内下赤村午未ノ方也、此道壱里計

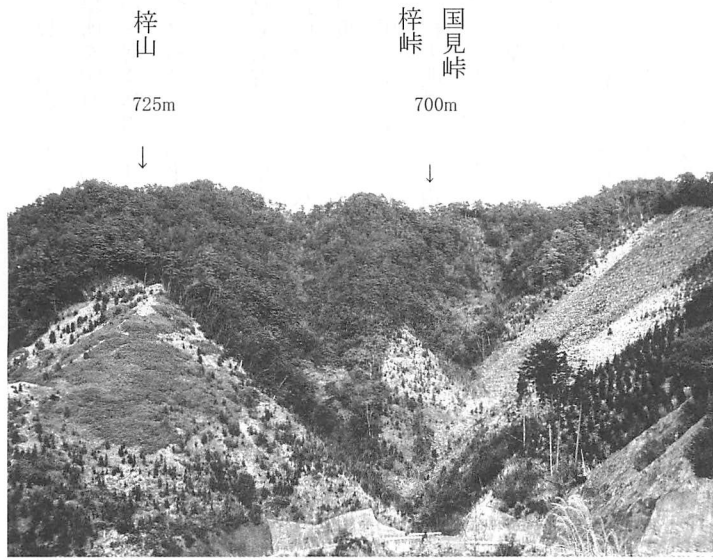
一梓より日向ノ内志いや村未ノ方也、此道壱里余計

一梓より日向ノ内上赤村甲（ママ）ノ方也、此道弐里計

〈中略〉

一梓より宇目ノ内すいか谷ハ戌ノ方、梓峠よりすいか谷
之古屋敷迄弐拾七八町計、上赤村よりくすの木峠を越
シすいか谷を通り長谷へ出る道有　〈以下省略〉

中川家文書　神戸大学文学部日本史研究室所蔵



林道　上赤・鐙線から梓山　国見峠　梓峠

宇目　梓峠付近の日向道

二　梓大明神・二本杉（豊後杉・日向杉）

数々の古文書に登場する豊後杉と日向杉、梓大明神の場所を宇目在住の方に尋ねてみたが判らなかった。梓峠から宮崎県側に日向路を歩き下り探索したがなかなか見つけることが出来なかった。

二〇一二年の秋、手掛かりを求めて延岡に出掛けた。帰路立ち寄った北川支所で八戸（やと）の伊東氏が詳しいと教えて頂いた。その足で八戸（やと）集落に行き路上で居合わせた人が伊東氏本人でした。梓大明神を探している事を話すと車で現地まで案内して下さいました。

梓大明神は、林道上赤（かみあか）・鐙線（あぶみ）から作業道を南に五分位下った左手、梓峠から南に延びる尾根の中にありました。小さな屋根が掛った社の中に御神体である石が鎮座していました。

二本杉は、御社から少し下った平な所にあって立ち枯れた木が立ち並ぶ中に朽ちた大きな株がありました。作業道入口迄は数度来ていたので本当にあっけない幕切れでした。

豊後杉は県境から水平距離で凡そ一．二kmの所にあり

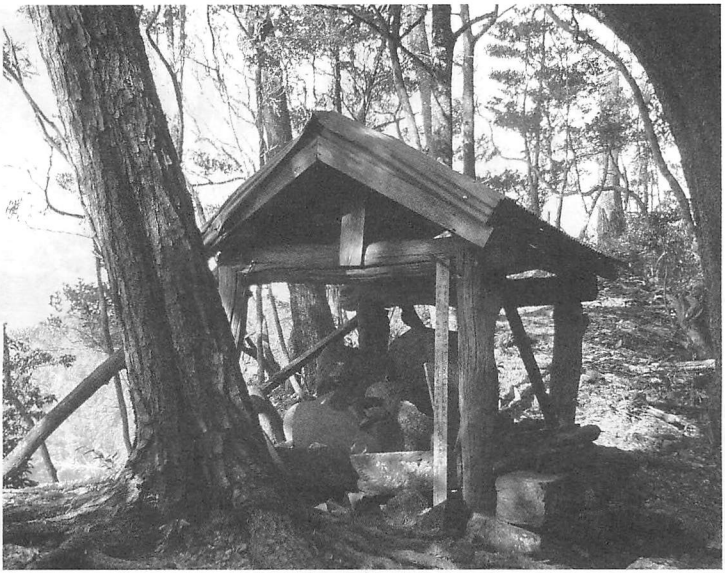
現地を見て岡藩は随分と欲張ったものだと思いました。

一説では境争いは梓山の豊富な森林資源を巡っての争いであったとも言われています。

林道上赤（かみあか）・鐙（あぶみ）線は県境の南標高四百m～五百mの所にあり尾根筋を上下に分断して峠道の踏査を難しくしています。

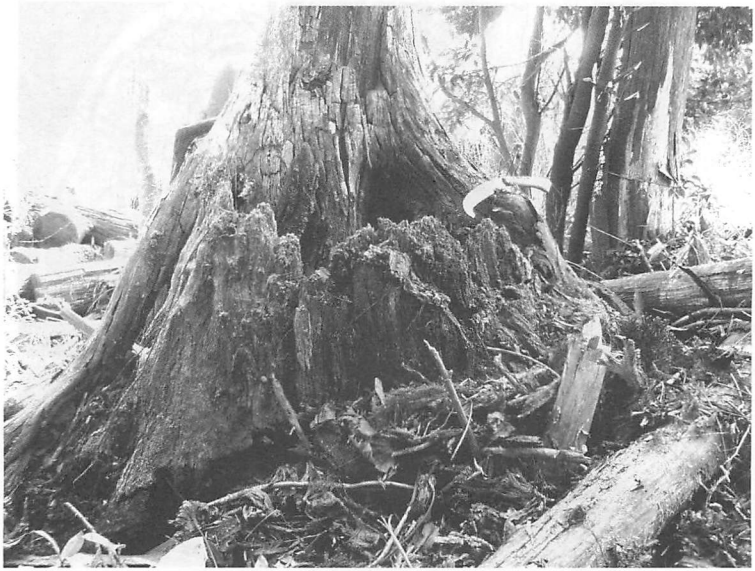
梓大明神は八戸（やと）集落の氏神様で毎年正月二日に氏子代表が初詣でをしています。今は林道を利用してお詣りが出来ますが、林道が無い頃は大向（おおむかい）集落から御社まで、峠道を二時間近く歩いてお詣りをしていたそうです。

翌年から探索を共にしてきた会員小野幾夫氏と梓大明神に初詣でをしています。その時八戸の方から大向集落に下る途中に、馬立場（馬十頭位を休ませる事ができる広場）や水場（西行水）、御茶屋の跡がある事等を聞きましたが、ウラジロの藪の中に埋もれていて探し出す事が出来ませんでした。



梓大明神

梓大明神と二本杉　　豊後杉・日向杉　標高 500m



豊後杉と推定される朽ちた杉の大株

三　梓山国堺争論について

元禄十二年にこの地で起きた境争いは、岡藩（重岡村・小野市村）と延岡藩（川内名村）との間で話し合ったが決着がつかず、宇目の庄屋達が江戸に上り、幕府の評定所に「恐れ乍書き付を以て御訴書申上げ候」と訴え出た。

延岡藩も直ちに応訴、両者立会いの下論所を書き込んだ絵図を持って江戸に上り対決、評定所での取調べは延岡藩の言い分がほぼ通り、六ヶ月後岡藩敗訴の裁きが下りました。

論所のひとつが梓峠周辺で、延岡藩は尾根筋梓峠から遠見塚（吹石）迄が境、岡藩は梓峠から四町日向側に下った豊後杉と尻無の尾・吹石を結ぶ線が境とした。また豊後杉の傍にある梓大明神は宇目七社のひとつであると言って両藩共に譲らなかった。

県境にある標高五八〇ｍの山を延岡藩は遠見塚、岡藩は吹石と呼んでいます。

会誌十四号～十七号に羽柴先生が「梓山国堺の論争文書」という題で矢野家文書を紹介しています。

なお、この争論については、次のような資料があります。

豊後杉から尻無の尾

「宇目郷案内」　宇目郷案内刊行会　大正十一年

八　梓峠

重岡村水ヶ谷にあり、元禄年間より現今に至るまで豊日國境論争あり

國志に曰ふ　（注　豊後国志）

宇目郷水箇谷の南に在り、桑原山と相對す

高山長嶺、上に路あり、日向の延岡に達する七里、碑あり豊日の界を標す、元禄十二年定むる所なり、舊界は東に下ること十八町祠あり四代明神と稱す、又梓の神と云ふ、豊後宇目の七社の一なり、重岡の梓田は盖しその祭田なり、其例に老杉三株あり、地を界して既に是を改む後日人これを伐るの滅跡朽根尚在す、所謂豊後杉なり圍八尋二尺餘、日向杉圍六尋五尺其間杉あり、圍二尋三尺蓋し是王者の政、州郡を分ち疆域を正ふし私に定る所なし後世の細（民）境を侵し姦吏之これに依り兩造情偽、辨納相亂致する所なり

元禄十二年春頃より此の地へ日豊の境界論争は幕府に訴えられて幕吏の裁判する所となりたるが實は論争者は豊後重岡及び日向河内名の百姓のみにあらずして其の後に岡藩延岡のありし事は歴然たるものあり、若し兩藩表面立たゞ干戈を交ふるに至るを怖れ斯く百姓の論争となしたるものなり　〈以下省略〉

「梓山論について」　石川恒太郎　昭和十五年

日向市出身　宮崎県文化財専門委員

この論文は、昭和十五年に社会経済史学第十巻第五号に発表されました。延岡藩内藤子爵家の史料

「梓山所書之次第一、二」

「豊後日向公事目安」

写本「梓論　御評定所ニテ申上候口上覚」

写本「日向豊後の国境」

写本僧道順著「舊跡見聞録　縣解集」

を基に書かれているので注目に値します。

社会経済史学は大分大学図書館に所蔵されています。

四　その他

①　観音滝

水ヶ谷集落から北川に流れ出る谷の途中に高さ一〇〇mはある階段状の滝があり、谷の左岸上部のくすの木峠道から滝の上部を見る事が出来ます。

②　くすのき峠

集落から県境までの峠道は観音滝の左岸上部にあり、ほぼ水平につけられている。宮崎県側は一部を除いて大半が消失していました。

③　大峠

集落から県境近くまでは緩やかで平坦な地形で作業道が峠近くまでありました。

峠から南の峠道はツツジ谷に沿って下り、尻無（しりなし）の尾の腹を巻いて下赤に下りていますが、林道によって尾根が途中で分断されていました。

尾根の最も高い所の南側は崖で遠目には白く見え格好の目印となります。

④　大日如来像

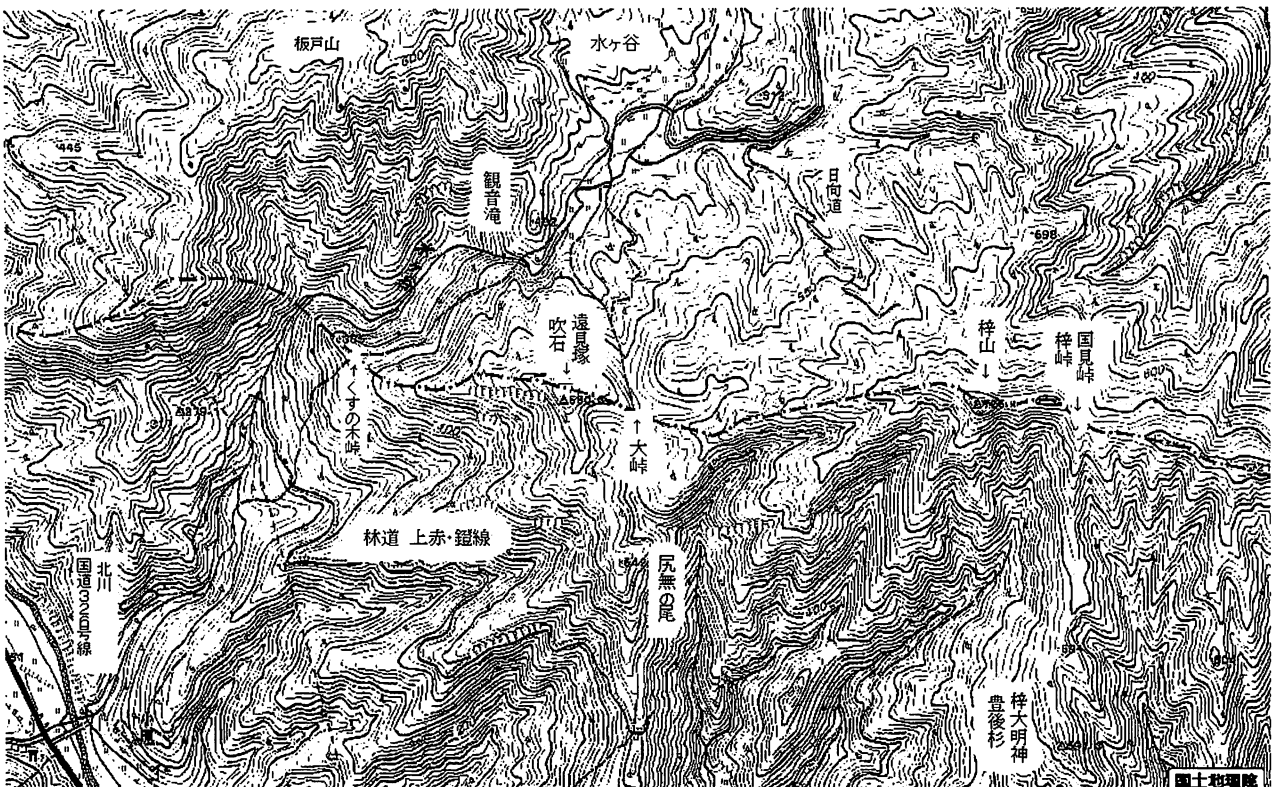
林道から尻無の尾根に上がった峠道の傍らにあり、嘉永七年甲寅七月の年号が台座にありました。

また、この尾根筋に西南の役の時のものと思わる環状の防塁跡もありました。

林道　上赤・鐙線からくすの木峠

大峠　県境付近　標高 480m

水ヶ谷周辺図


北
板戸山
水ヶ谷
観音滝
日向道
遠見塚
吹石
くすの木峠
大峠
梓山
梓峠
国見峠
林道 上赤・鐘線
尻無の尾
北川
国道
梓大明神
豊後杉
国土地理院